

2020年度冬期の取り組みに関する検証を求める申し入れ団体交渉 今冬期に向けて昨冬期の成果・課題を検証

新潟地本は8月25日、申14号・2020年度冬期の取り組みに関する検証を求める申し入れの団体交渉を行いました。

申4号「雪害により発生した諸問題に関する申し入れ」の団体交渉では労使で認識の一致が図られた項目がある一方で、「新潟支社としてトレース中であり示せない」との回答に留まった項目が存在することから、昨冬の雪害で発生した課題を解決するために申し入れを行っていたものです。

昨冬期の成果と課題について

2020年度冬期の取り組みの成果と課題を明らかにするよう求め、「12月中旬から広範囲にわたる断続的な大雪となったが、運転計画の早期判断と前広な情報提供等に取り組んだ」として、「安全安定輸送の確保に向け、今後とも同様に取り組んでいく」との回答を受けました。



地本交渉団は、具体的な営業では、お客さまに対する情報提供をホームページ、SNSなどあらゆるツールを活用して早めに行ってきたとしました。設備では、各系統で限られた要員の中で必要な要員を確保しながら除雪を行ったとし、連絡体制の課題など引き続き今冬に向けて取り組むとしました。支社側は、昨冬に得た知見をもとに、限られた予算、設備の中で可能な限り

次の冬期に向けて整備を進めて行きたいとの考えを示しました。

■手配の課題について

運休等の手配について支社側は、基本的には雪害対策本部での大きな方針を受けて、個別には指令が列車運休を決めて電報を起して流すことになり、そのスピードアップが課題であるとしました。交渉団は、お客さまへの情報提供が前広に行われる一方で、社員には情報、連絡が届かないことがあり、この冬期に反映させるものがあるのかを問いました。支社側は、第一線の社員まで一律に全員同時は難しいが、タイムラグを少しでも埋めることが課題であり、運転計画を含め対策本部の情報提供を早く広めるために何かしら方法があるのかを検討課題であるとしました。

■除雪体制の課題・成果
支社側は、企画部門の社員を現地に派遣して、現場社員の負担軽減も含めて現場社員と共に除雪対応にあたったとしました。また機械技術センターや土木が保線の除雪の手

伝いに行くなど、これまで無い形での取り組みも行ったとしました。

■車両センター、新津運輸区構内除雪に対する課題

支社側は、除雪のタイミングや範囲、所要時間などの計画精度を高めることが課題だとしました。長岡車両センターについては長岡駅構内との出入区線にスプリングクレーを設置するなどの改良工事等を行ったとしました。MR除雪を車両センターの要員のみで行えないかという組合側の提案に

責任者を含めてどの箇所まで行って良いかなど指示を受けた中で除雪作業を行うとしました。設備部としては、対策会議後の各系統での共有について、除雪計画を現場にタイムリーに繋げなかったことを課題として捉えているとして、チームス等を活用しながら情報共有、認識の一致を図りながら、現場と指令の中で除雪計画を練って行く形で考えているとしました。

申4号交渉での未整理項目について

申4号の団体交渉において「トレース中であり示せない」との回答を受けた項目について、トレースを終えての支社側の認識を質しました。

初列車対応の2両分以上の両数の列車が入った駅で、まだ乗降口の除雪が

■駅の除雪体制

対して支社側は、MRの操作、除雪に関しては設備側が熟知していることから今冬は現状の体制で行く考えであるとしました。

■輸送指令と保線技術センターとの連携
輸送指令と保線技術センターの打ち合わせから着手まで時間がある時に想定から変わったタイミングで計画が変更されたようなどことはあるとしました。支社側は是正するべき点として情報共有を一番のポイントとして挙げ、現場と認識を図りながら除雪計画に反映すること、現

減策について
冬期における指令員の著大な超勤について、大雪に伴う33発動によるものであり、36超勤に関しては平準化しているとした支社側に対して交渉団は、要求は負担軽減減策であり、超勤が多いが36超勤は45時間を下回っているのだから良いことにはならないと指摘しました。

■輸送指令社員の負担軽減

支社側は、業務内容としてどうしても担当者を変えられないために超勤が生じる部分があり、超勤が多くても負担軽減を理由に勤務変更も出来ないことから定時退勤を促すというような形で対応するしか無いとしました。交渉団は、指令員は強い使命感を持って仕事に臨んでいるが故に、体とのギャップにより過労死のような悲劇的なことが起きないよう軽減策に取り組むよう求めました。

支社側は、産業医を含めて面談などルールに基づいて行っており、指令室の中でも総括を含めて把握しているとした。

